



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	歴史文化的発展過程からみたサッカーの指導方法に関する研究：教授プログラム作成の試み〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	佐藤, 亮平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第12892号
Issue Date	2017-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67796
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Ryohei_Sato_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（教育学）

氏名 佐藤 亮平

学位論文題名

歴史文化的発展過程からみたサッカーの指導方法に関する研究
—教授プログラム作成の試み—

本研究はサッカーの歴史文化的発展過程から戦術史を捉えることにより、学校体育の学習者に適用可能なサッカーの指導方法の確立を目指した新たな教授プログラムを作成することを目的とした。なお、作成した教授プログラムに即した指導実践の一考察を試み、その是非も検証している。

学校体育におけるサッカーの技術・戦術指導に関する成果と課題を解決するには、サッカーの技術や戦術が指導法にとっていかなる意味を有するのか明確にする必要があった。これに関し、先行研究はサッカー文化の楽しさを学習者にわかりやすく伝えるために、サッカーの起源やゲームの発展形態に遡り、文化の奥行から指導法に接近する試みを提示してきた。しかしながら、近年注目されているダイナミカル・システムアプローチやコンプレックスシステム論をサッカーの歴史文化的発展過程に即して解明しようとした研究はこれまで体系的になされてきていない。そこで、本研究は F. Lebed らによって近年精力的になされてきた「コンプレックスシステム (complex system)」論が集団スポーツの「競技構造」を明らかにする上で有効であるとの仮説をたて、その仮説検証のために戦術の発展過程を詳細に検討し、サッカーの技術・戦術構造を明らかにすることを方法論に据えた。なお、従来提示されてきたサッカーの「技術的特質」を再定義し、戦術「システム」がどのような質的な階層を有しているかについても検討を行った。

次に、戦術史の発展過程をサッカー指導の機序に応用し、教授プログラムの構築を試みた。加えて、この指導方法に基づいた授業実践を行い、成果と課題について考察した。

以上の方法論を用い、次のような知見を明らかにした。

第1章では文部科学省の『学習指導要領』に基づくサッカー指導に関わる成果と課題、欧米を中心に世界的な広がりを見せる「戦術学習論」の研究の成果と課題、学校体育研究同志会による「運動文化論」の成果と課題、日本サッカー協会による指導理論の成果と課題を検討することによって、既存のサッカー指導の成果と課題を概観し、本研究の課題を明確にした。結果、サッカー指導に関する研究は1. グループ戦術からチーム戦術やシステムを指導することへ移行の必要性、2. 守備の学習の重点化、3. ゲームパフォーマンスを向上させることを課題としていることが明らかになった。

第2章では、チーム戦術やシステムの位置づけを明確にし、サッカーの競技構造を明らかにした。具体的には「技術的特質」を規定する観点及びその規定方法に関する研究を通してサッカーの「構成要素」及び「競技構造」を明確にし、チームとプレーヤーの関係性について「コンプレックスシステム (complex system)」論から解明を試みた。以上により、サッカーにおける「技術的特質」を再定義した。

第3章では、第2章で用いた「コンプレックスシステム (complex system)」論の有用性を基に、戦術「システム」がどのような質的な階層を有しているのかを明らかにするため、戦術史について検討した。とりわけ「コンプレックスシステム (complex system)」論の観点から戦術史を紐解くことによって、サッカーの構造における歴史的文脈を把握することが可能となった。戦術史を概観し

た結果、戦術「システム」には5つの段階があった。1850年代から1925年までの初期サッカーの段階には、多様な戦法が地域毎に存在し、各地域でのサッカーがFAに集約される中で「パス」を中心とするサッカーが優位性を発揮するようになる。ついで、1925年のオフサイドルールの改正も相まって、攻守の役割を明確にする「攻守分業制」のシステムが構築される段階に至る。そしてさらに、この「攻守分業制」が進むと次第にこれを凌駕する新たなシステムを構築する必要性が高まり、攻守両面において役割をもつ中盤のポジションがシステム内に確立され、やがてフィールドの選手全体へ波及していく「全員攻撃・全員守備」の萌芽が1950年に生まれ、その後確立していく。1980年代末に「ゾーンプレス戦術」が導入されたことにより、両チーム間が30m内に収まる時間的・空間的余裕の無い戦いが展開され、「守備と攻撃の一体化」が生まれた。こうして、「15秒以内の勝負」という高速化した戦いが展開されるようになる。このような動向の中、2006年のワールドカップが転機となり、2008年のEUROにおいて開発された新たなシステムである「攻守の一体化」する現代サッカーのシステムが誕生し、今もなお進化し続けていることが明らかになった。以上のことは、サッカー戦術における「コンプレックスシステム (complex system)」の更新過程であったと分析できる。

第4章では、サッカーの歴史的発展過程に基づき、サッカーの技術や戦術の構造を明らかにした。技術・戦術構造を検討するためには、技術や戦術に関する用語の意味を理解する必要があるため、それぞれの用語の概念整理を行った。次いで、既存の技術・戦術構造における成果と課題の明確化により、戦術史を技術・戦術構造に変換することが極めて有効であるという視点を得た。そして、第3節では歴史的発展過程におけるチーム戦術およびシステムの発展段階を指導の観点から捉えなおし、サッカーを教える上で根幹をなす技術・戦術構造を提示した。具体的には、サッカーの技術・戦術構造における「質的発展段階」を戦術史から明らかになった5段階の発展過程に即して階層化した。さらに、各「質的発展段階」に応じたグループ戦術及び技法を取り入れ、既存のサッカーの技術や戦術との融合をはかった。以上は、サッカー文化の成り立ちから、指導方法を明確にする過程であった。

以上を受け、第5章では「教育目標」、「教育内容」、「教材の順序構造」、「教授の方法」、「評価論」からなる中学校体育授業におけるサッカー指導のための「教授プログラム」を作成した。その際、再定義された「技術的特質」を基に「教育目標」を設定し、歴史的発展過程、技術・戦術構造から「教育目標」を達成するために必須となる「教育内容」を導いた。そこで抽出された技術や戦術を教材化し、その順序を「教材の順序構造」として相応しいものであるか吟味した。

以上の「教授プログラム」に基づき実験授業を試みた結果について、第6章で検証した。本実験授業の対象は、中学校体育授業の学習者とした。結果、教育目標については守備の目標の達成に課題が残ったが、概ね教育目標を達成することができた。それゆえ、本研究が作成した「教授プログラム」は対象とした集団において、一定の有効性があると思われた。しかしながら、実験授業は一つの試みに過ぎず、精選された「教授プログラム」の修正・改善に向けて、今後も実験授業を積み重ねる必要がある。

他方、これまで十分に戦術「システム」の指導について検討されてこなかったフィールドに対し、「コンプレックスシステム (complex system)」論や戦術史に基づいたサッカーの指導方法を明確にしたことは新たなサッカー指導の可能性を切り拓くという点で、一定の意味を見出すことにつながったと言える。